社会科学研究所　公開研究会等の記録

＜2023年度＞

公開研究会	
日 時	2024年3月9日(土)　　14:00～17:00
開催形式	中央大学茗荷谷キャンパス3階3E06教室及びオンライン会議システム(Zoom)のハイブリッド形式
テーマ	合評会『「大東亜共栄圏」における南方国策移民―「南方雄飛」のゆくえ』 (大久保由理著、晃洋書房、2023年)
報告者	①森　亜紀子　氏(同志社大学<奄美―沖縄―琉球>研究センター研究員) ②北田　依利　氏(法政大学国際文化学部・埼玉大学教養学部非常勤講師) ③細谷　亨　氏(立命館大学経済学部准教授) リプライ:大久保　由理　客員研究員(東京大学大学院経済学研究科附属日本経済国際共同研究センター特任研究員)
概 要	今回の研究会では、客員研究員の大久保由理氏の単著『「大東亜共栄圏」における南方国策移民―「南方雄飛」のゆくえ』(晃洋書房、2023年)を巡って、南洋群島研究の森亜紀子氏、米国およびアジア太平洋地域(日本帝国とフィリピン)研究の北田依利氏、満州移民研究の細谷亨氏が書評報告を行い、著者がリプライを行う合評会を行った。 第一報告では、森氏によって次の2つの論点と提案が示された。1点目は著者が使う「南方」という範囲の揺れである。政策目的としての東南アジアに着目した場合と、実際に派遣された場所としての東南アジアおよび南洋群島という場合で、範囲が揺れている。南洋群島はあくまでも「その先」の東南アジア進出を目指すための「訓練地」に過ぎないと考えると、同様に沖縄―台湾―南洋群島―東南アジアという、「より南へ」という志向性を含む概念として、「南方国策移民」を捉えることができるのではないか。2点目は、グレーゾーンとしての、セミ・エリートの日本人青年という設定が、文化人類学の領域での「協力者」「文化媒介者」としても機能しており、それが南洋庁の実業学校生徒の経験とも類似していることである。これにより、沖縄・台湾・南洋群島における中等教育機関の連動性が見える可能性がある。さらに、フィリピンという欧米列強地における日本人青年が目の当たりにする階層間のねじれ、つまりインターセクショナリティの観点から青年の日記を分析することは可能か、という質問がなされた。 第二報告では北田氏が、英語圏の日本帝国史研究のなかに位置づけながら本書の意義を示した。まず「南方」という太平洋諸島と東南アジアを含んだ地域への着目が、東アジアに偏らない、様々な日本帝国の地域を接続して検討する可能性を示したこと、次に、キャストを被害者であり加害者である、という青年層に選定したことで帝国史の多層性を描いたこと、さらに、エゴ・ドキュメントを使ってこれまで歴史の主役にされてこなかった人々の感性や知性を検証する可能性を開いたことである。一方で、主役の伊藤敏夫のフィリピン経験に、現地日本人社会の存在がほとんど見えてこない点を指摘し、その語りの意味について著者に問うと同時に、日本人社会と40年代移入の企業および日本人たちとの接触や交差の解明が求められた。最後に、著者が補論として扱った、日本占領下のグアムにおけるチャモロ側の「記憶」については、現地の教科書に記憶されていることの裏付けを日本人側とチャモロ側との聞き取りで行っていることから、補論ではなく章とすべき、と提案した。 第三報告では細谷氏が、本書では十分に拾い上げられていなかった多くの先行研究を参照しながら、本書を評価した。まず、本書が研究史上初めて「南方国策移民」の全体像や実像を明らかにしたこと、それを政策側と主体側(移民)、日本側と現地側、教育と移動といった多面的に理解しようとしたこと、その際に日記や書簡など私文書を活用しており、エゴ・ドキュメント研究の良質な成果であるとした。また、南方国策移民は、従来の移植民研究では必ずしも視野に入っていなかった、短期的な労働移動(企業・軍属)や苛烈な経験を示しており、青少年・学生の動員と犠牲および教育史に関わる議論を展開しているとし、さらに満州移民と同時並行的に実施された点をもって国策移民の議論を拡張した、と評価した。そのほか、拓務省の主体的関与が示されたことや、「植民される側」からのアプローチによって、グローバル・ヒストリーや「歴史総合」の深化にも寄与したとした。一方、こうした彼等の経験が戦後にどう活かされた／活かされなかったといえるのか、伊藤敏夫を典型と考えることの意義と限界、企業側にとっての拓南塾生の意味などについて質問が出された。 リプライでは大久保氏が、各報告者の質問に順に回答した。まず、森氏の「南方」の整理に同意し、伊藤日記からは階層間のねじれは明確には読み取れなかったと述べた。次に北田氏の現地日本人社会との交差について、聞き取り調査や伊藤日記では、確かにタルラックに日本人社会があったことが分かり、伊藤も接触があったことが分かっているが、具体的に倉敷紡績の棉花事業とどのような関与があったかについては今後の課題とした。最後に細谷氏の質問については、戦後は今後の課題であるが、本書に書いた範囲ではJICAの前身団体に入って再渡航するなどの連続性は見られること、伊藤敏夫は典型とは言えないかもしれないが、その生真面目な性格で拓南塾の教えを几帳面に実行しようとしてそれが明確に破綻していることから、「大東亜共栄圏」の思想の空疎性を明確に示したという点で意義があると述べた。企業側にとっては、拓南塾生の賃金は高めに設定しており、少なくとも採用時や幹部クラス社員には意義が理解されていたと考えられるが、一般社員間ではほぼ認識されておらず、断絶していたと述べた。 総合討論では、対面・オンライン双方から多くの質問が出された。南方国策移民にとっての台湾の意味および戦後への影響、南方国策移民にとってのマレー語の意味とはなにか、あるいは「国策」の中身などについて白熱した議論が行われ、終了時間を30分延長して盛会に終わった。
主 催	「ジェンダーと政治、歴史、思想の交差点」チーム(幹事:鳴子　博子　研究員)

公開講演会	
日 時	2024年2月24日(土)　　15:00～17:15
開催形式	ソレイユさがみセミナールーム2
テーマ	プロジェクト 家族の多様化をめぐって　沖藤典子さんと 一緒に考える 「日本家族のこれから」 テーマ：現代日本家族のゆくえ
報告者	沖藤　典子　氏(ノンフィクション作家)
概 要	1. 概要 当日は「多様化する家族」をテーマに、前半1時間は沖藤典子氏による基調講演、後半は講演内容を踏まえて広岡守穂名誉教授および山田昌弘主査が各20分ほどコメントした後、参加者からの質疑応答の時間を設けた(予定時間を15分超過)。 一般参加者は19名(開催時刻の直前に電車が運転を見合わせたため、出席予定であった3名から来られなくなったと連絡があった。)。その他、ソレイユさがみ館長他、スタッフ3名が傍聴した。 2. 講演内容 山田主査によるあいさつに続き、広岡名誉教授による本講演会のテーマや沖藤氏について簡単な紹介を行った上で、沖藤氏の新著「「父の支配」を乗り越えた時―娘と名字」の内容に沿って「日本家族のこれから」を考える基調講演が始まった。 沖藤氏は、自らの経験を通して感じた日本の家族における家父長感覚の根強さ、「民法750条」と夫婦別姓への思い、そして人口が減少し、多様化している現代社会において時代に合った司法整備の必要性と社会問題を全員で解決していくことの重要性を語った。 広岡名誉教授は、自身のことを振り返りながら、男女で「結婚」と「恋愛」に対する考えが違うのは、根強い家父長感覚(ここでは女性が親や親が認めた相手(夫)に依存して生活の安定を得るという考え)が影響しており、いまのジェンダー平等問題には女性の責任が相当にあると衝撃的な考えを示し、夫婦別姓を支持する一方で、女性の経済的自立を前提として、結婚という制度で夫婦関係を法的に保護する必要はないと考えているとも述べた。 山田主査は、新著「パラサイト離婚社会―結婚生活には何が必要ですか」に沿って現代日本の結婚について論じた。女性の経済的自立により恋愛感情に基づく結婚が増えるだろうと想定していた「婚活」という言葉が、かえって現実を見せてしまい若者を恋愛から遠ざけることになり、現在では合理的に結婚相手を選ぶ「データ婚」が増加、「好き」という感情はペットや「推し」が受け皿となっていると述べた。そして夫婦の仲の良さの二極化にも触れ、恋愛感情と結婚生活の関係を再考する時代になっているとした。 3. 質疑応答 　自身が夫婦別姓を選択するために日本では未婚の方が経験したトラブルの話や夫婦別姓を実現するために個人でできることは何かなどの質問や、国際結婚をしている方の相手方の国での名字の制度について、変化していく社会と変わらない意識の差へのもどかしさについてなど3名の方が発言し、司法や立法に携わる人の意識、その元となる国民の意識の変容の必要性を確認した。
主 催	「多様化する家族」チーム(幹事：山田　昌弘　　研究員) 共催：ソレイユさがみ(相模原市男女共同センター)

公開研究会	
日 時	2024年2月3日(土)　　16:00～18:30
開催形式	中央大学茗荷谷キャンパス2階2E05教室及びオンライン会議システム(Webex)のハイブリッド形式
テーマ	フランコフォニーとは何か　ー過去、現在、未来ー
報告者	小松　祐子　氏(お茶の水大学教授)
概 要	本報告は、フランス語を基盤とする国際的な連帯運動および国際組織であるフランコフォニー(la Francophonie)について、その歴史と現状を紹介し、課題や意義を検討した。「フランコフォニー国際組織(OIF)」は、日本ではほとんど知られていないが、半世紀以上にわたる歴史をもち、現在88の国と政府が加盟する国際組織である。どのような経緯でこの組織は誕生したのか。またその活動はどのようなものであるのかが、豊富な資料により紹介された。 今日世界で3億2100万人が話すとされる(OIF, 2022)フランス語は、フランスを中心とするヨーロッパを起源とし、大航海時代以降の植民地主義により世界各地に普及した。フランス語圏は、ヨーロッパから、北米、カリブ海、アフリカ、インド洋、アジア、太平洋の島々にまで拡がっている。そして、第二次大戦後の脱植民地化の運動と並行して起こった運動が「フランコフォニー運動」であり、フランス語を共有する人々の連帯が目指された。彼らの運動をもとに成立し、拡大発展したフランコフォニー国際組織は、今日どのような課題と向き合い、その存在や活動にはどのような意義があるのだろうか？ さらに、フランコフォニー運動の今後の展望はいかなるものか？ 報告では、これらの問いへの答えが、さまざまな観点から考察された。 報告終了後、報告者と参加者との間で、活発な意見交換・質疑応答がなされた。
主 催	「文化現象の政治的、歴史的、法的分析：学際的挑戦」チーム(幹事：西海　真樹　研究員)

公開研究会	
日 時	2024年1月20日(土)　　14:50～17:00
開催形式	東洋大学川越キャンパス4号館5階総合情報学部学部長室
テーマ	情報通信業に読書バリアフリーを定着させるには―電子書籍を中心に
報告者	植村　要　客員研究員(国立国会図書館参事)
概 要	2023年7月、市川沙央氏の芥川賞受賞によって「読書バリアフリー」の語は、多くの人に知られるところになった。しかし、この分野は、「アクセシビリティ」の語によって、既に一定の取組が蓄積されており、いくつかの日本産業規格やガイドラインも策定されている。しかし、現状はといえば、市川氏が指摘するように、解決すべき課題があると言わざるを得ない。 上記を踏まえ、本報告では「読書バリアフリー」や「アクセシビリティ」の語によって進められてきた情報通信分野の取組について、特に電子書籍を中心に現状を紹介した。その後、今後に向けた課題の解決策を活発な議論を通じて検討した。 なお、研究会では報告者がパワーポイント資料を投影、印刷配布し、報告した。その後、参加した教員、大学院生と意見交換した。参加者からは、主に以下のような意見が出された。 ・電子書籍・電子図書館のアクセシビリティに関し、海外での取組が進んでいる国や、その状況はどのようなものか。 ・電子書籍・電子図書館のアクセシビリティ機能に関し、視覚障害者等にとっての必要性が高い一方で、民間企業の負担も確かであり、どのように調整すればよいか。 ・点訳・音訳をするボランティアを新規養成するために、社会に向けてどのように訴求すればよいか。 これらの意見について、参加者で議論をした。
主 催	「生存保障システムの形成と変容」チーム(幹事:天田　城介　研究員) 共催:東洋大学総合情報学部加藤千恵子ゼミ

公開研究会	
日 時	2024年1月20日(土)　　13:30～18:00
開催形式	中央大学多摩キャンパス2号館4階研究所会議室1及びオンライン会議システム(Zoom)のハイブリッド形式
テーマ	①産後ケア事業の日韓比較 ② アイスランドにおける女性議員の増加とフェミニスト・サイクル
報告者	①長谷川　曾乃江　氏(中央大学政策文化総合研究所客員研究員) ②塩田　潤　客員研究員(龍谷大学法学部非常勤講師)
概 要	第1報告は長谷川氏の近年の韓国留学とその後の調査研究の成果によるものである。ともに少子化の勢いの止まらない韓国と日本に焦点を当て両国の「産後ケア」を比較し、日韓モデルの長短所を確かめ、それぞれの今後の課題を示す報告であった。そもそも韓国には出産後、母親の健康を維持する養生行為「産後調理(サヌチョリ)」・サヌチョリ文化が存在するが、1990年代後半に産後調理院(サヌチョリウォン)事業が急成長した。日本の産後ケアのアウトソーシングが自治体の母子保健行政であるのに対し、韓国の場合、民間ビジネスとしてサヌチョリウォン事業が登場、急成長したことに大きな特徴がある。 日本型の場合、公的事業ゆえに平等性は確保しやすいが、自治体財政に依存しているためサービスの自治体間格差が生まれる。他方、韓国型の場合は、顧客のニーズに合わせたプログラムが展開されるなど自由度が高いが、民間ビジネスゆえに、その展開が都市に偏り、産後ケアの経済・地域間格差が広がるといった問題が顕著になっており、不足する公共サヌチョリウォンの増設が課題とされている。このように日韓モデルそれぞれに残された課題を比較検討して報告は終えられた。 　報告後、オンライン参加者、対面参加者の双方から質問が出され、質疑応答が活発に繰り広げられた。 第2報告は、アイスランド政治研究の塩田氏に、アイスランドでなぜ女性議員が多いのか、同国の政治過程やフェミニスト・サイクルをめぐって報告いただいた。女性議員が増加した原因を探るうえで、1975年の国家規模のフェミニスト・ストライキ「女性の休日」、世界初の「民選女性大統領の誕生」(1980年)、さらに1983年結成の女性政党「女性同盟の台頭」の3点に注目して氏は政治過程を追跡する。 氏はこれら3つの出来事の間に「先行者は後続者のための機会を作り出す」フェミニスト・サイクルを見て取る。「女性の休日」は女性としての集合的利益の可視化と女性としての集合行為の経験であり、ヴィグディスの大統領選挙は集合的利益と集合行為を政治代表へと方向づけるものであり、これら2つが開いた機会を活用することで女性同盟が台頭するという一連のサイクルを氏はフェミニスト・サイクルと呼ぶ。氏は、「女性の休日」と1980年の大統領選挙が政治社会におけるジェンダー関係を変化させ、1975年以降の大規模動員を伴うフェミニスト・サイクルの生起が女性議員増加のきっかけとなり、政治的機会が次々と開放されたものの、政党政治空間においてはいまだ機会が閉じられていた複合的状況の中で女性同盟の台頭が実現したと結論づけた。 　以上のように、第2報告は、ジェンダーギャップ指数1位の国であるにもかかわらず、ジェンダー平等をリードしてきた北欧諸国の中で研究が著しく少ないアイスランドのジェンダー平等化プロセスを分析した明快な報告であった。 報告後、対面・オンライン双方の参加者から多岐にわたる質問が出された。経済、特にリーマンショックとジェンダー平等の関係、女性同盟の政党としての性質、クオータ制について、LGBTQの解放とフェミニストとの関係、北欧の中でのアイスランドの特異性、一般に成功しないと言われる女性政党がなぜ成功したのか、などである。活発な質疑応答となったため、時間を延長し、残れる参加者は残って質疑応答を続けた。
主 催	「ジェンダーと政治、歴史、思想の交差点」チーム(幹事:鳴子　博子　研究員)

公開研究会	
日 時	2024年1月19日(金)　　17:00～19:00
開催形式	中央大学後楽園キャンパス3号館3310教室及びオンライン会議システム(Webex)のハイブリッド形式
テーマ	芸術文化環境を取り巻く課題と支援の取り組みについて
報告者	今野　真理子　氏(公益財団法人東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京講座事業係長)
概 要	日本では文化芸術基本法(2017年より施行)が文化芸術振興のよりどころとなっており、文化庁や文科省(文化庁)所管の独立行政法人等によって国の施策が取り組まれている。文化庁予算額は近20年間、約1000億円で推移しており、国家予算の1%にも満たない。他方、2000年代以降はアーツカウンシルという文化政策の執行を担う中間支援機能の導入について議論が高まり、2011年から(独)日本芸術文化振興会がその機能を担うことが提唱され、その後2012年にアーツカウンシル東京が東京都により設置された。また、地域版アーツカウンシルの先駆的機能として横浜市のアーツコミッション・ヨコハマが2007年から始動する等、地域における文化芸術支援の取り組みも新たな動きをみせている。 コロナ過には文化芸術領域の活動は中止や休止に追い込まれ、飲食業や宿泊、航空産業に伍する経済的な打撃に直面した。公的支援の投入も行われたが、さまざまな課題が浮き彫りになった。 以上のような背景をふまえて、本報告は、日本で行われているさまざまな文化活動に対してどのような支援策・支援制度があり、そこにどのような課題が生まれているかを、諸外国の文化政策と比較しながら紹介・考察するものだった。報告終了後、報告者と参加者との間で、活発な意見交換・質疑応答がなされた。
主 催	「文化現象の政治的、歴史的、法的分析:学際的挑戦」チーム(幹事:西海　真樹　研究員)

公開研究会	
日 時	2023年12月23日(土)　　16:00～18:00
開催形式	中央大学茗荷谷キャンパス2階2E04教室及びオンライン会議システム(Webex)のハイブリッド形式
テーマ	Law and Opera: a Methodological Perspective through the Analysis of Giacomo Puccini's Madama Butterfly 法とオペラ:ジャコモ・プッチーニ「蝶々夫人」の分析を通じた方法論的展望
報告者	COLOMBO Giorgio Fabio　氏(名古屋大学大学院法学研究科教授)
概 要	本報告のテーマは、「法とオペラ」である。コロンボ教授によれば、両者の結びつきを解明する方法論視点は3つある。 1)オペラにおける法:オペラで描かれる諸問題は、法的にどのように評価できるか？ 2)オペラにかんする法:著作権などは、オペラをどのように法的に規律しているか？ 3)オペラをめぐる法:オペラと法との間の、より広範な関係は、どのようなものか？ 本報告は、これら3つの視点のうち1)を採用した。分析対象は、ジャコモ・プッチーニの代表的オペラ「蝶々夫人」である。コロンボ教授は、このオペラが初演された1904年当時の日本法(1898年民法、法例、国籍法)に依拠して、ピンカートンと蝶々夫人の物語を分析し、次の問いへの答えを導いた。 1)2人の結婚は有効に成立したか？ 2)どのような法が2人の結婚生活を規律したか？ 3)1904年当時の日本法は、夫が妻を遺棄することで一方的に離縁することを認めていたか？ 報告終了後、参加者と報告者の間で、活発な質疑応答が行われた。
主 催	「文化現象の政治的、歴史的、法的分析:学際的挑戦」チーム(幹事:西海　真樹　研究員) 共催:中央大学国際関係法研究会

公開研究会	
日 時	2023年7月25日(火)　　10:00～12:15
開催形式	中央大学多摩キャンパス2号館4階研究所会議室1及びオンライン会議システム(Webex)のハイブリッド形式
テーマ	Generative Learning：知の母胎づくりから始める学び
報告者	原尻　淳一　氏（龍谷大学客員教授，事業構想大学院大学 事業構想研究所客員教授）
概 要	原尻先生のお話は、まずは、地蔵、空海とドラッガー、カエルの誕生、レオナルド・ダ・ヴィンチ、といった例を出しながら、知の母胎づくりの重要性について聞く人の意識を喚起させるところから始まった。そして、ウォルター・アイザックソンが注目したダ・ヴィンチの「知の源泉」、すなわち観察に基づく7,200枚におよぶ自筆ノートの記録、アナロジー、経験と理論の融合という三つの中で、現在の学生には、理論（既存知）はあっても経験（観察、アナロジー）が足りないことを指摘された。 その後、梅棹忠夫のフィールドノート（『知的生産の技術』）、グレゴリー・ベイトソンから学ぶ温故知新の重要性（『自然と精神』）などを話題として取り上げながら、昔の人たちの学びをもう一度見直す必要があることを強調された。そのような思考から原尻先生が生み出したのが、「知の技法」の授業であり、これは、前近代の学びを取り入れた学びである。具体的には、「あ」の六進法、すなわち、あるく（歩）、あつめる（集）、あらわれる（想）、あわせる（交）、あらわれる（説）、あらわす（伝）の実践による学びであるが、その一つ一つの段階に偉大な先人たちの手法が取り入れられている。多くの大学生は「自分の知の基盤」をもっていない。すぐに答えを知ろうとし、自分で問いをたてたり、仮説を立てたりする慣習がない学生がほとんどである。そのような彼らが仮説や問いを立てるには、自分が当事者として切実にかかわる問題でなければ難しいであろう。大学に求められているのは、1.2年のときは自前の知の基盤の構築にあて、3.4年生でこれまでの大学教育に繋ぎこむ大胆なカリキュラムデザインである。 ご報告の後は、会場とオンラインからの質問にお答えいただき、会場ではさらに原尻先生の教育実践についてより詳細な資料を見せていただく機会を得た。
主 催	「大学の教養教育に関する国内的および国際的比較」チーム（幹事：中坂　恵美子）

公開講演会	
日 時	2023年5月31日(水)　　15:10～16:50
開催形式	中央大学多摩キャンパスグローバル館GG701教室及びオンライン会議システム(Webex)のハイブリッド形式
テーマ	アイデンティティと尊厳：なぜグローバル化する世界の中でナショナリズムは繁栄するのか
報告者	Chandler Rosenberger　氏（ブランダイス大学准教授）
概 要	このグローバル化の時代にナショナリズムが興隆しているのは何故なのか？ ナショナリズムは，ブレグジット，ウクライナ， EU におけるハンガリー，ドナルド・トランプの「アメリカ・ファースト」政策など， 枚挙にいとまがない。 ナショナリズムを説明する理論 ナショナリズムは本能的なもの ではなく，ナショナリズムは社会的に構築された現実である。 ナショナリズムの定義 ナショナリズムには 3 つの共通原則がある。国民主権，同胞との連帯，平等と尊厳である。 ナショナリズムは必ずしも民族紛争や外国人排斥を引き起こすものではない。 ナショナリズムの種類 共通の価値観 による 市民的ナショナリズムと， 血統 による 民族的ナショナリズムがある。 ナショナリズムの歴史 歴史的には、ナショナリズムはヘンリー 8 世時代のイギリスに遡る。 日本 に も、明 治維新によりナショナリズムが制度化され など 歴史的に世界中に伝播したのは，ナショナリズムが 尊厳と居場所の感覚を提供する強力な思考法だからである。 社会により人々は異なるナショナルアイデンティティを持ち，文化により異なる オペレーティングシステム が存在する。 インプリケーション ナショナリズムは社会的に構築されているので，私たちは自分たちの社会でどのような組織原理をオペレーティング・システム と するかを，選ぶことができる。
主 催	社会科学研究所（幹事：武石　智香子　研究員）